

岡崎むかし館

つちにんぎょう 土人形 (2) — 題材 —

三河地域は明治中頃～大正時代、「三河土人形」と総称される土人形の一大製作地でした。その特色として題材に、二躰の^{たい}人形を組み合わせて^{かぶき}歌舞伎の名場面(特に動きのある^{あらごと}荒事)などを表現したものが多そうです。当時の庶民の^{ごらく}娯楽の代表といえ^{しばいげんぶつ}ば芝居見物で、祭りには芝居が^{えんちく}演じられ大勢の人が集まりました。ですから、歌舞伎などを題材とした人形も、誰もが^{えんちく}何の演目の場面かがわかりました。現在では娯楽も多様化し、歌舞伎芝居を身近で親しむ機会も減り、人形を見てその題材がすぐわかる人も少なくなりました。多くの土人形を目にする機会に、日本の古典芸能である歌舞伎の演目を、調べてみるのもおもしろいと思います。



大浜土人形(組物)／作:祢宜田章 弁慶(左)と富樫(右)

勸進帳(かんじんちょう)

みなもとのよりととも
源 頼 朝 と不和になった義経は、弁慶らとともに山伏、^{やまぶし}強力(荷物持ち)姿に変装して逃げ、^{あたか}安宅の関へさしかかる。関守の^{とがしき}富樫左衛門の前で、弁慶がなにも書かれていない巻物を^{かんじんちょう}勸進帳として読み上げたり、見とがめられた義経を杖で折檻するなどの苦労の末、許され^{むつ}陸奥へ落ちのびる。
『歌舞伎ハンドブック第3版』2006,三省堂,p267 より)



大浜土人形(組物)／作:祢宜田章 重忠(左)と景清(右)

菊重栄景清(きくがさねさかえのかげきよ)

〔通称：牢破りの景清・景清〕

平家滅亡後も、源氏に敵対する^{あくしちびょうえかげ}悪七兵衛景清は牢に閉じ込められ、平家の^{せいざん}重宝、青山の^{びわ}琵琶と青葉の^{ふえ}笛の行方を^{はたけやましげただ}畠山重忠と^{いわなが}岩永左衛門に追及される場面。執拗な追及に怒った景清は牢をこわして^{くる}荒れ狂う。
『歌舞伎ハンドブック第3版』2006,三省堂,p195 より)